

幼・小・中学校における選択性緘黙に関する質問紙調査（Ⅰ）

—在籍状況および学校における困難と支援の課題について—

○松下浩之 酒井貴庸 奥村真衣子 下山真衣 園山繁樹
(山梨大学教育学域) (甲南女子大学人間科学部) (筑波大学人間総合科学研究科) (信州大学学術研究院) (筑波大学人間系)
KEY WORDS : 選択性緘黙 学校 在籍状況

I. 問題と目的

趙・園山 (2017) は選択性緘黙の有病率に関する先行研究を検討し、海外の文献では0.02~1.89%とされているが、年齢段階ごとに調査した研究は少ないこと、及びわが国の有病率を調べた研究はCiNiiとJ-STAGEを検索すると2件(0.027~0.19%)しか検出できなかったことを明らかにしている。また主症状は学校での発話困難であることから、学校での合理的配慮が求められるが、どのような困難が広く見られ、どのような配慮がなされているかについては十分明らかになっていない。本研究では、一定地域内にある公立の幼稚園、小学校、中学校を対象に質問紙調査を行い、選択性緘黙幼児児童生徒の在籍状況、学校場面での困難の状況、学校での配慮等について明らかにすることを目的とした。

II. 方法

1. 調査対象と調査時期：関東地方のA県B教育事務所管内にある公立幼・小・中学校全269校(幼稚園36園;子ども園2園含む、小学校165校、中学校68校)を対象に、2017年2月10日~3月10日にかけて実施した。
2. 調査方法：郵送法にて以下の項目について回答を求めた。回答者職名、学校概況(学年別幼児児童生徒数、特別支援学級・通級指導教室の有無等)、選択性緘黙幼児児童生徒の在籍状況、支援における困難、支援体制、各事例の概況(教科・場面ごとの困難と症状、具体的な支援、変化、等)
3. データの処理：幼稚園14園、小学校46校、中学校15校の計75校から返送があり、すべてを分析対象とした(回収率27.9%)。得られたデータについてクロス集計を行い、校種ごとに在籍人数や場面ごとの症状発生数を算出した。支援における困難については「あてはまらない」(0点)から「あてはまる」(3点)、困難の程度については「困難ではない」(1点)から「とても困難」(4点)まで点数化し、平均値を求めた。
4. 倫理的配慮：調査目的および回答は自由であることを記した説明書と、校(園)長が署名する研究協力承諾書を同封し、回答と一緒に承諾書を返送してもらった。

III. 結果

1. 選択性緘黙幼児児童生徒の在籍状況：各学校において在籍ありと回答した学校数をTable1に、各学年にお

Table1 選択性緘黙児の在籍状況

	在籍校数	在籍校率
幼稚園 (n=14)	4	28.6%
小学校 (n=46)	18	39.1%
中学校 (n=15)	7	46.7%
合計	29	38.7%

Table2 在籍児の性別および学年

	性別			合計
	男児	女児	合計	
幼稚園				
年少	0 (0.0%)	3 (8.1%)	3 (8.1%)	
年中	0 (0.0%)	1 (2.7%)	1 (2.7%)	
年長	0 (0.0%)	2 (5.4%)	2 (5.4%)	
小学校				
1年生	0 (0.0%)	1 (2.7%)	1 (2.7%)	
2年生	1 (2.7%)	3 (8.1%)	4 (10.8%)	
3年生	3 (8.1%)	1 (2.7%)	4 (10.8%)	
4年生	2 (5.4%)	6 (16.2%)	8 (21.6%)	
5年生	1 (2.7%)	0 (0.0%)	1 (2.7%)	
6年生	1 (2.7%)	3 (8.1%)	4 (10.8%)	
中学校				
1年生	3 (8.1%)	2 (5.4%)	5 (13.5%)	
2年生	2 (5.4%)	0 (0.0%)	2 (5.4%)	
3年生	0 (0.0%)	2 (5.4%)	2 (5.4%)	
合計	13 (35.1%)	24 (64.9%)	37 (100%)	

Table3 支援を実施する際の難しさ

	幼稚園	小学校	中学校	合計
「選択性緘黙」という言葉を知らない	0.62 (0.96)	1.07 (2.25)	1.73 (3.08)	1.23 (3.94)
選択性緘黙がどのような症状なのか知らない	0.92 (1.04)	1.11 (2.25)	1.93 (3.01)	1.35 (3.65)
話さないだけで、できることは多いため、支援を必要とする問題として認識していない	0.62 (0.65)	1.41 (2.51)	1.93 (3.01)	1.48 (3.78)
内気な性格との違いがわからない	0.85 (0.90)	1.46 (2.50)	2.07 (2.99)	1.57 (3.27)
家族との認識にズレがある	3.38 (3.31)	1.91 (2.42)	2.40 (2.85)	2.36 (3.90)
支援を行うことに対して家族の理解が得られない	2.77 (3.61)	1.67 (2.72)	2.20 (2.88)	2.07 (4.38)
どのようにコミュニケーションを取ればよいかわからない	3.23 (3.39)	2.07 (2.29)	2.27 (2.84)	2.40 (4.22)
良かれと思って行った対応が適切であるなど、適切な接し方がわからない	3.46 (3.23)	2.17 (2.30)	2.40 (2.80)	2.53 (3.83)
クラスメイトにどのように理解を求めればよいかわからない	2.54 (2.96)	2.09 (2.31)	2.13 (2.92)	2.27 (4.22)

それぞれ平均値と、() に標準偏差を示す。

る在籍人数と性別をTable2に示す。在籍校率は、幼稚園28.6%、小学校39.1%、中学校46.7%と、中学校がもっとも高かった(Table1)。また、全37事例においてさまざまな学年が挙げられたが24事例(64.9%)が女児であった。

2. 支援における困難 (Table3)：全校種において、「適切な接し方がわからない」という項目がもっとも困難が高かった。また、中学校では選択性緘黙そのものについての理解に関する困難が多いのに対して、幼稚園では支援の方法に関する困難が多かった。

3. 緘黙症状を示す場面と困難の程度：各教科等における困難の程度をTable4に、各場面における緘黙症状の発生状況をTable5に示した。小中学校においては音楽や

Table4 各教科等を含む活動における困難の程度

	幼稚園			小学校			中学校		
	頻度	割合	平均	頻度	割合	平均	頻度	割合	平均
朝・帰りの会	1.25	(0.42)		2.50	(1.06)	2.33	(1.22)		
給食・弁当	1.33	(0.52)		1.55	(0.96)	2.22	(1.20)		
自由遊び	1.50	(0.55)		1.43	(0.79)	2.11	(1.05)		
運動	1.17	(0.41)		2.57	(1.20)	3.11	(0.93)		
音楽	1.67	(0.82)		2.21	(1.36)	3.11	(0.93)		
造形	1.33	(0.82)		2.36	(1.09)	3.11	(0.93)		
読み聞かせ	1.50	(0.84)		2.29	(1.21)	3.22	(0.83)		
手遊び等	1.00	(0.00)		2.00	(1.12)	3.25	(0.96)		
集団遊び	2.33	(1.21)		2.00	(1.07)	2.78	(1.30)		
				図工	1.82	(1.10)	2.67	(1.32)	
				外国語	2.56	(1.25)	3.11	(0.93)	
				家庭	2.00	(1.15)	3.00	(1.32)	
				音楽	2.61	(1.12)	3.44	(1.13)	
				道徳	2.09	(1.19)	3.22	(1.20)	
				総合学習	2.47	(1.07)	2.56	(1.13)	
				特別活動	2.36	(1.14)	2.56	(0.88)	

それぞれ平均値と、() に標準偏差を示す。

Table5 各活動や場面における緘黙症状の発生数

【各教科等、授業内】	幼稚園		小学校		中学校	
	頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合
教科書やプリントなどの音読 (あらかじめ書いてある他人の文章を問われる場面)	19	(82.6%)	4	(17.4%)	8	(88.9%)
作文、感想文などの書写 (あらかじめ書いてある自分の考えや回答などを問われる場面)	18	(78.3%)	7	(30.4%)	8	(88.9%)
教師の発問に対する回答 (その場での回答を求められる場面)	2	(33.3%)	1	(16.7%)	20	(87.0%)
グループ活動 (少人数の場内での話し合いや協力場面)	2	(33.3%)	1	(16.7%)	19	(82.6%)
音楽や体育、図工などの技能の発表 (歌謡や楽器演奏、試技などが求められる場面)	0	(0.0%)	0	(0.0%)	18	(78.3%)
音楽や体育、図工などで一斉発表 (合唱や発表会、チームプレイが求められる場面など)	1	(16.7%)	1	(16.7%)	4	(17.4%)
【授業外の日常活動】						
教師や友だちに対するあいさつ (あいさつをされた場面)	3	(50.0%)	1	(16.7%)	19	(82.6%)
健康観察時の返事 (学級の中で呼ばれた場面)	3	(50.0%)	1	(16.7%)	14	(60.9%)
日直の仕事 (朝の会等における司会や号令など)	4	(66.7%)	2	(33.3%)	18	(78.3%)
休み時間	4	(66.7%)	1	(16.7%)	15	(65.2%)
クラブ活動や部活動			11	(47.8%)	0	(0.0%)
【行事等の活動】						
運動会や体育祭	3	(50.0%)	1	(16.7%)	18	(78.3%)
校外学習・遠足・修学旅行	2	(33.3%)	0	(0.0%)	18	(78.3%)
合唱コンクールや発表会・文化祭など	2	(33.3%)	1	(16.7%)	16	(69.6%)

それぞれ症状の発生した事例数と、() に発生率を示す。

IV. 考察

先行研究での有病率はきわめて低い率であるが、本研究の結果から、在籍する学校(園)の割合は高かった。このことは、3分の1から半数の学校には選択性緘黙の子どもが在籍している可能性があり、学校全体で情報共有することで早期発見と早期対応(合理的配慮)をしていく必要性を示している。また、すべての学年において事例が挙げられたこと、緘黙症状の発生状況や困難の程度のばらつきなどから、選択性緘黙幼児児童生徒の状態像の多様性が考えられた。今後は、多様な実態や困難さを詳細に分析し、効果的な支援を検討するために、対象を拡大して調査を行う必要があると考えられる。

V. 引用文献

趙成河・園山繁樹(2017) 選択性緘黙の有病率に関する文献的検討。障害科学学会第12回大会ポスター発表。

【付記】本研究はJSPS科研費16H03808の助成を受けた。(MATSUSHITA Hirokyu, SAKAI Takanobu, OKUMURA Maiko, SHIMOYAMA Mae, SONOYAMA Shigeki)